



チェルノブイリに春を

フランク
ジョンソン
ジョンソン
ジョンソン

貴重な人間の物語となりました。ヨーロッパクラフト展覧会のナレーター、アイン博士が著書から一部を抜きお読みの後、開場者全員で宣誓する式典が実施された。参加者は、N.Y.P.D.の巡査「チャーリー・ノーブル」、州議員、州議会議員にあわせて、市議院の議員に手を貸す。運営の中では、政治家が政治家の隠れ家で開催されるところも珍らしく、我心の大事と感ぜた。貴重な人間の物語をする上記、充実した内容を詰め込んだ大作となりました。

「名古屋の花」で十日間文化化
名古屋のNPOが支援計画

昨年からナロジチ現地サイドと濃密な話し合いを重ね、いよいよこの春、菜種をまきます。「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」の本格的スタートです。

このプロジェクトの成功の鍵を握ることとなる現地の最高責任者は、ナロジチ地区行政長のサブリュク氏。彼は大学で電気関係を学び、コルホーズ長の経験を持つ、申し分のない人物ですが、何よりも、彼自身がナロジチ出身でブルシロフに移住した被災者なのです。

<07年2月19日 中日新聞掲載>

その彼が、このプロジェクトへの意気込みを熱く語り、この先の嬉しいプロジェクトを自分の使命と感じさせてくださいました。静かな感動を感じます。

このプロジェクトは5ヵ年計画で進められ、総事業費は4,000万円以上を予定しています。その半分以上が、バイオディーゼル油製造装置とバイオガス製造装置の費用であり、一年以内に必要です。「寄せられたカンパから支援する」という従来の形式を変え、「必要な資金を集める」という大勝負に私たちも挑みました。私たちがこの計画を完遂できるよう、皆さんもサポーターになってください！ 築の花を咲かせましょう！ そして、いっしょに「放射能除去」という難問に取り組みましょう！

＜1,000円/日から；何回でもOKです。＞

私たちとは事務から21年経った今こそ、オロシチの木々に復讐の空吹奈威にしてほしくのです。

(节选自《史记》)

〒466-0822 名古屋市守山区楽園町 137 1-10
 Chernobyl 救援・中部 代表: 市原佳代
 郵便振替: 00880-7-108610
 TEL/FAX: 052-836-1073 (月~金 10:00~17:00)
 ホームページ: <http://www.chernobyl-chubu.jp.org>

ナロジチ地区、充分な受け入れ準備を確認！

4月の種蒔きを目前にした1月21日～30日まで、「菜の花プロジェクト」の調査・打合せに行ってきました。今回の訪問者は、土壤浄化担当／河田昌東さん、バイオディーゼル燃料（以下BDF）製造装置担当（誌面著者）／「伊那谷菜の花処理」理事の前澤功さん、バイオガス担当／原富男の3名と、現地留学中の戸村京子さん、キエフ駐在員で通訳の竹内高明さんでした。現地には8日間滞在し、ナロジチ地区行政・混合飼料工場・ナタネ栽培用の畠・農業生態学大学などを訪れ、打合せや調査をしました。



◎土壤浄化について

土壤浄化については、2日前に降った雪のため、地面は見ることができなかったものの、菜種栽培用の畠が用意されていました（ナロジチ町のはずれの4ha）。農業大学では、実際に栽培・実験を担当するティードウフ教授と河田さんの間で、熱心な話し合いが行われ、栽培時期・栽培方法・放射能測定方法・作業員の被曝防止方法などの詰めを行いました。また、大学と「救援・中部」との間で、事前に「契約書」を締結するべきであり、また、ウクライナ人道支援委員会の承認を得なければ、栽培・研究費用に対して、課税されるということもあって、つっこんだ話し合いが行われ、契約内容は大筋で合意されました。栽培費用（物資含む）は36万円、実験・測定費用は303万円で、合計年間総額は339万円になります。

◎BDFとバイオガス

BDFとバイオガスについては、ナロジチ行政および設置予定地の配合飼料工場で、話し合いました。特にナロジチ行政長のサブリュク氏は、菜の花プロジェクトに乗り気で、熱心に勉強している様子が分かり、プロジェクトの現地側責任者となることを、即座に了承してくれました。サブリュク氏は、元ナロジチ出身の技術者だそうで、ナロジチに深い思い入れがあるのです。BDFとバイオガス製造装置が設置される配合飼料工場には、使っていない倉庫建物が3棟あり、一棟を種子・菜の花（茎・根・葉）の貯蔵に使い、一棟をBDFに使い、一棟をバイオガス関係で使うという具合に、贅沢に使えそうです。バイオガスの汚泥処理についても、乾燥場所とするのに充分な広さがあり、問題なく使えそうです。また、放射能を含む汚泥の保管先が地区内にもあるとのことで、今後更に詰める必要はあるのですが、まずは一安心です。

今回の訪問は、事前には様々な心配事があったものの、予想以上に現地の期待と理解が大きく、受け入れ備がしっかりとできていたことは、大きな収穫でした。
（長野県南箕輪村 原 富男）

菜の花プロジェクトを題材に、中学校で授業をしました。

去る3月9日、東京都足立区にある「足立第5中学校」から「セルノブリ・菜の花プロジェクト」について話をするように頼まれ、3年生80名を前に2時間の授業をしました。授業と言っても講演会のようなものですが、相手が中学生ということで、私自身の人生も語らなくてはなりません。

中卒で上京し、働きながら通信制や定時制の高校に通ったこと、給料のほとんどを親に仕送りしていたこと、両足の骨髓炎の病についてなども交えて話しました。セルノブリ原発事故の概要・当時の日本の様子・被害の実態から、「救援・中部」の活動・「菜の花プロジェクト」に至るまで、盛りだくさんの内容を話しました。

授業が終わって数日後、子ども達の感想文が送られてきました。

菜の花プロジェクトの仕組みを聴いた時は「すごい！」のひと言でした。僕は最初、菜の花でどのように放射能を除去するのか不思議だったのですが、説明を聞いて理解する事ができました。今回は、ありがとうございました。（男子）

菜の花プロジェクトって、すごいと思いました。土の中にある放射能を、菜の花でなくそうという事に、感動しました。事故で放射能が広い範囲に出てしまったという事で、多くの人がこのプロジェクトに参加しているのはスゴイと思いました。その地方の野菜なども危ないと言う事が分かって、育てている人も野菜もかわいそうでした。(性別不明)

お話しをしてくださって、ありがとうございました。 Chernobyl の大変な現状が分かりました。菜の花プロジェクトの良さも分かりましたし、それを発見した人達はすごいなと思います。これからも活動を頑張ってください。(女子)

通信制・定時制に通いながら仕事をして、偉いと思いました。「なんでも屋」をやりながらも、菜の花プロジェクトをしていて、すごいと思いました。少しでも放射能がなくなるのを願います。(男子)

授業中は、ちゃんと聞いているのか不安でしたが、送られてきた感想文は実に素直でした。
子どもの頃から成績の良くなかった私が、授業をすることになろうとはビックリですが、これもChernobyl の取り持つ縁かと思います。授業に呼んでくれたのは、私がまだ通信制や定時制で勉強していた頃、同じアパートの隣室に住んでいた戸恒さんという古い友人です。 (長野県南箕輪村 原 富男)

ナロジチ菜の花プロジェクト訪問記

ヘルシンキ・ハンター国際空港を離陸してから、わずか1時間30分後にはウクライナ・ボリスピリ国際空港に到着した。今回初めてウクライナを訪問するに当たり、事前にウクライナについて勉強しようと思い、インターネット等でウクライナに関する事柄を検索した。しかし、日本語の情報はあまりにも少なく、目新しい内容はほとんどなかった。「百聞は一見にしかず。先入観を持たずに、ありのままを見る」というスタンスで行こうと、即座に決めた。



ボリスピリ空港に到着したのは夜であったため、あまり周りの印象はない。だが「国際空港にしては貧弱だな」というのが第一印象であった。その日の内にジトーミル市に向かい、21時過ぎによくやくジトーミルホテルにチェックインした。

今回の訪問では、菜種栽培による土壤の放射能汚染除去プロジェクトについて、具体的な費用の積り合せを行うことが主となった。同時に、BDF 製造設備の設置場所の確認、バイオガスに関する調査等も重要な事項であった。

2日目以降は、訪問団の河田さん・原さん・戸村さん・現地駐在員通訳の竹内さん・ホステージ基金のキリチャンスキーさんと私の6人で行動した。ジトーミル州行政経済局では、事前に提出した BDF 関連の質問状の回答や、法律関係について聞くと同時に、ナロジチ菜の花プロジェクトについて質疑応答を行った。農業生態大学では、今回のプロジェクトの大学側責任者であるティードゥフ教授と、見積もりの細部に渡って数回の打ち合せを行った。ナロジチ地区行政長サブリュク氏との話し合いは、とても有意義で友好的に行われ、行政の積極的な支援で、今後の展望に光が見えた気がした。ナロジチ「お湯さま幼稚園」での園児達の屈託のない笑顔にも、勇気づけられた。

ウクライナの印象としては、「生活基盤がまだ十分に整っていないこと」を強く感じた。また、ナロジチとキエフとの格差には、愕然とした。しかし、人情に厚く、ウォッカを飲み交わす姿は、日本の田舎にも似た心地良さであった。「ナロジチ菜の花プロジェクト」の行く手には、未だ数々の難問が待ちかまえていると思うが、「是非とも実現したい」という気持ちが、一層強くなった。また、「もっともっとウクライナを知りたい」という想いも、強くなった。

(アルプス開発技術研究所所長 前澤 功)

「お陽さま」の光線たち

V.S.キリチャンスキー

『ジトーミル州』

2006年12月30日掲載記事

この名前がついたナロジチ町の幼稚園には、125本の「光」がある。今日、125人の子ども達が、そこに通っているのだ。入園できる順番を待っている子ども達が、さらに30人いる。この幼稚園は、チェルノブイリ原発事故後しばらくは、閉鎖されていたというのに！

この幼稚園は、町の誇りであると同時に、町長V.V.クラフチエンコ氏が、何より気にかけている施設でもある。すべての設備が整った2階建ての快適な建物に、独立のボイラー室・手入れの行き届いた庭・遊戯場が付属している。「将来を考えて生きなければなりません…」と、V.V.クラフチエンコ氏は言う。

「…ここは第2ゾーンですが、移住の援助はもう誰もしてくれないでしょう。子ども達は、次々に生まれています。先週だけでも、4人が生まれたのです。少ながらぬ問題の解決に、力を貸してくれるスポンサーがいるのはありがたいことです。子ども達の給食は、町議会の負担ですが、子ども達に我々の問題を説明して聞かせるわけにはいきません。——彼らは今日すでに、充分に栄養のある食事をとらなければならないのです。今、幼稚園の定員拡大を考える必要があります。地区行政の協力を仰ぎたいと思います。地区行政にとっても、子どもはやはり最優先の対象であるはずだと、私は確信しています。」

新年を控えたある日、「お陽さま」幼稚園に大勢のお客様がやってきた。最も敬意を表すべきお客様は、地域党所属の最高会議議員O.O.クラフツォフ氏、そしてジトーミル市第25番学校の高等部生徒会運営委員、イヴァンナ・オメリチュクさんとフリスティーナ・サヴィツカさんだった。

クラフツォフ氏は、125人分のお正月のプレゼント、そして同じ数だけのカップとカフェオレ茶碗を持参しており、高校生たちは、園児一人一人におもちゃを渡しただけでなく、さらに残ったおもちゃを遊戯室用に寄付した。ジトーミル市第25番学校は、常に何らかのチャリティ・キャンペーンを行っている。古紙回収をして、その収益を宇宙船設計者のS.P.コロリョフ博物館に寄付したり、「ナロジチの1グリウナ」キャンペーンに参加して、903グリウナを寄付したりなど。この

感謝状

各民族には、それぞれのすばらしい伝統があります。ナロジチ町の「お陽さま」幼稚園では、数年前から、聖ムイコライ〔注：サンタクロースのような正教の聖人〕の日を祝うようになりました。そしてこの祝日は、子ども達にとって一番好きな祝日になりました。彼らは、首を長くしてこの日を待っています。保育士たちと一緒に、聖ムイコライが持ってきててくれる贈り物を入れる長靴を作ります。そして今年の祝日は、私たちの就学前児童教育施設にとって、特別な日でした。「チェルノブイリの人質たち」基金代表のV.S.キリチャンスキーさんが、子ども達にお祝いを言い、「チェルノブイリ救援・中部」からのプレゼントを渡してくださったのです。子ども達の喜びには、際限がありませんでした。園児たちは、特に、日本の子ども達が自分で作ってくれたクリスマスカードをもらって、大満足でした。次のクリスマスまでには、「お陽さま」幼稚園の園児たちも、日本のお友達のために、自分達でカードを作ることをお約束します。端緒についていた私たちの友情が、とぎれることなく続き、年々ますます強めていくことを心から願っています。当園の職員と父兄会一同、そして園児たちは、「チェルノブイリ救援・中部」の皆さん、ナロジチの子ども達に対する思いやりと真心、善良さとご配慮に、厚くお礼申し上げます。

ナロジチ町
「お陽さま」幼稚園園長
T.A.クラフチエンコ



学校では、聖ムイコライの12月19日のひと月前から、「チェルノブイリの人質たち」基金の勧めで不用なおもちゃを集め、ナロジチの子ども達に渡すために持てて来たのである。

贈り物に誰よりも感激したのは、園長のT.A.クラフチエンコ氏かもしない。タチヤナ・アナトーリイヴナは、お客様達に6つのグループを見せて回り、母親にするのと同じようにすりよってくる子ども達を抱きしめ、スポンサーに心から感謝しつつ、彼らについて子ども達に話した。その後、園長室に入ってから、園の抱えている緊急の問題についての話があった。厨房の道具を更新しなければならないのだが、予算がないのだ。しかし、喜ばしいニュースがあった。日本の団体「チェルノブイリ救援・中部」の支援があるという知らせだ。「救援・中部」は、まさにこの幼稚園のために、資金を送ってくれたのである。その一部は、ビタミン剤などに用いられ、残りは厨房用品（スープ用の大型寸胴鍋）にあてられた。

…お昼寝の時間だ。爪先立ちで部屋に入り、眠っている子ども達を眺める。まさにこのような瞬間、これらの男の子や女の子に対して自分の負っている責任が、ひしひしと感じられる。彼らは、国の将来そのものである。そしてそれは、単なる美辞麗句ではなく、事実その通りなのだ！

~~~~~\*~~~~~\*~~~~~\*~~~~~\*~~~~~\*~~~~~\*~~~~~\*~~~~~\*~~~~~\*~~~~~\*

### アートセローからサレジオの皆様へ！！

私たちは、カーチャとユーリヤとナージヤとダーシャです。  
日本の子ども達、特に、マオとワカナに感謝しています。これからも、こういう暖かい関係が続いていくことを願っています。

日本のアーティストの皆さん、こんにちは！私は、ナディヤといいます。10歳です。皆さんのカードが、とても気に入りました。とてもきれいなんだもの！私は、「雪だるまコンクール」が大好きで、いつも参加しています。私の作品が、日本で展示されたらいなあと思います。ナディヤ

日本の皆さん、こんにちは！私は、ターニヤといいます。もうすぐ10歳です。カードをいただいた、うれしかったです。私は、女の子の作ったカードをもらいました。ありがとうございます！私も、彼女に絵を描いてあげたいです。来年は、私の絵が皆さんに気に入ってくれたらいいなと思います。ターニヤジトミル市

私は絵を描くのと、粘土絵工が好きです。日本のカードが、とっても気に入りました！  
【名前不明】



ウクライナの女の子、マリーナからのごあいさつです!!! 皆さん、がんばってカードを作ってくれてうれしかったです。

マリーナ・コスチュク ジトミル市

私は、日本のカードがとても気に入りました。私はもう1年、絵画教室「アート・ゼロー」で勉強していく、毎日上手になっていきます。

ストエンナヤ・ヴィーカ 11歳ジトミル市

私が「チェルノブイリの人質たち」基金での仕事を始めてから14年たった今、私たちが人々に対していかに多くの支援を行い、彼らからどれほど多くの暖かい感謝を受けたかについて、自信を持って語ることができます。

この間、私たちはさまざまな段階を経て、活動を続けてきました。雑誌の発行、移住者のための家の購入、病院への医療機器や医薬品の提供、医師たちの日本での研修、子どもや大人のサナトリウムでの保養、新生児のためのミルク、被災者である学生たちの奨学金…。このように、多岐にわたる支援に携りながらも、私たちはただ人を助けるだけでなく、その人自身がうつむけていた顔を起こして、すべてうまくいくと信じじことができるよう、そして、常に支援が効果的なものであるようにと、心がけてきました。しばしば、精神的な励ましが、金銭的な支援よりもずっと大きな影響を与えることがあるのです。

さらに指摘しておきたいのは、「チェルノブイリ救援・中部」との長年の協力の間に、私たちも、慈善活動のため自力で「稼ぐ」ことを学んだということです。それはまず、「チェルノブイリの1グリーナ」キャンペーンであり、やがて「ナロジチの1グリーナ」キャンペーンへと発展しました。寄せられる募金の額は、日本からいただく資金には及びませんが、人々の考え方には変わりつつあり、苦しみや悲劇を孤独なものにしてはならないこと、もし今日困っている人を助ければ、明日は自分の重荷と困窮を克服することが楽になるだろうということが理解され始めています。

「草の根無償支援プログラム」を通じての日本大使館との協力も、大変喜ばしいものです。これまで、ジトーミル州のどれだけ多くの施設が、新しい医療機器を提供されたことでしようか！　それは、子ども達が早期に診断を受け、村の診療所で最初の治療を受けることができるということなのです。

今、「チェルノブイリの人質たち」基金の仕

事は、ナロジチ地区の復興に向かっています。私たちに希望を与えてくれる「ナロジチの1グリーナ」キャンペーンは、医療支援だけでなく、地区が抱えているその他多くの経済的問題の解決を目指しています。村々の上水道の整備、ガス管を引く問題（多くの村では未だにガスが引かれておらず、昔ながらにペチカで薪を燃やしています）、幼稚園や学校・消防署や病院の必需品の供給など…。

奨学基金について、別個に述べたいと思います。ジトーミルの高等教育機関の学生たちが、月に125グリーナ（約3,000円/月）を支給されています。現在42名です。彼らはみな、それ各自個性が違いますが、彼らの青春を貧しさから少しだけ救ってやりたいのです。多くの学生たちは、このお金でヴィタミン剤や薬を買ったり、参考書を買ったり、母親や弟・妹のために実家に渡したりもしています。女子学生がやってきて、「わたし、結婚するの！」と明るいニュースを伝えてくれるのは嬉しいものです。男子は、「黙っていて、あとになってから譲らしげに結婚指輪を見せる」方を選ぶのですが…。

今年開始される一大プロジェクトのこと、黙っているわけにはいきません。準備段階の仕事、話し合いや議論は終わり、協力に関する契約が調印されて、これから新しい形の支援——ナロジチ地区でのナタネ栽培プロジェクト——が私たちを待ち受けています。私たちはこれまでに、農業に関わったことが一度もないのですが、ある意味では恐ろしくもあります。どのようにすべてを組織し、管理すればいいのでしょうか？　しかし他方では、これまでにやってきたことも、私たちにとってはみな初めてのことでしたが、結果としてそれをやりとげてきているではありませんか！　このプロジェクトもまた、成功裡に終わるものと信じたいと思います。私たちには、本当に信頼できるパートナー「チェルノブイリ救援・中部」がついているのですから。

エヴゲニヤ・ドンチェヴァ



## 「救助をするのは、溺れている人自身で？」

—ナロジチ地区復興の諸問題—(前編)

〔ジーミル州〕2006.11.7掲載記事抜粋

V.S.キリチャンスキ一筆 竹内高明訳

毎年、チェルノブイリの記念日には、私は欠かさず追悼の集会に行く。私たちすべてを救ってくれた人に敬意を表し、事故処理作業者たちと語り合い、彼らの数がまた少なくなっていることを悲しみを持って認めるためだけでなく、官僚たちのスピーチを聞くためでもある。

彼らの言葉が、なんと感動的なことか！ そして「今日でも、すべての人がチェルノブイリを記憶しており、事故処理作業者たちと被災者たち、今でも汚染された土地と家に住み続けなければならない人々達に、配慮してくれるだろう」と信じる気持ちが、沸いてくるのである。

黙祷のメトロノームの音が響き、砲声が起り、あたかも石棺の上を舞う天使のように鳴き空に飛び立ち、最後の「アーメン」の声が聞こえる…それで終わりである。4月26日の20周年記念日の後には、「ついに、人々がチェルノブイリの不幸に目を向けて始めたか」と思えた。「年々激減している補助金を出し続けるよりも、国の予算を、原子力事故の人質となった人々の住む地区の復興に向けよう」という志向は、希望を抱かせるものである。

州内の地区的うち、最も大きな被害を受けたのはナロジチ地区だった。事故前まで、約27,000人が住んでいたが、現在は10,000人強が残っているのみだ。かつては84の町村が存在していたが、現在は65であり、19はただ地図上に記されているばかり。ナロジチ地区には「部外者立入制限区域」「強制移住区域」「任意移住区域」そして「放射線管理強化区域」がある。地区的汚染は、事故後ただちに明らかとなった。その後、放射線測定は全く行われていない。しかし、それを行うべき理由が二つある。第一に、土地を再び利用するため。第二に、汚染度の減少は、地区的発展のための資本投下が可能となるのだ。今年9月、我々は日本の代表団とともに移住が行われた（今でも残っている人もいる）地区を訪れ、地表・路傍・森のキノコの総量【原文のママ】をも測定した。日本人たちが驚いたことに、すべての緑豊は基準値以内だった。我々はノーヴィエ・シャルヌ、ヴェルティキ・クリシ村にも行ったが、場所によるととはいえ、基準値の数十倍に及ぶ



緑豊が頃走された。数年前、地区から汚染されていない場所に移る希望に関するいつもの検査が行われた折には、580世帯が希望を表明した。人数にすれば1,400人であり、うち250人は児童、174人は老人である。移住の可能性を失った人々は（過去10年間に移住したのは55世帯にすぎない）、結局ここにとどまるのだということを理解した。だからこそ、しかるべき医療の提供・補償金の支払い・職場を求めているのだ。職場は、医療以上に重要なものでさえある。仕事があれば、明日を思いわすらうこともなく、社会的・心理的雰囲気も改善されていくからだ。地区住民のうち、4,430人は年金生活者、1,947人は児童、就労人口は2,374人で、合計8,751人。1,250人は地区内では働いていない。これはそのすべてが失業しているということではない。農業は、耕作面積も減り、集団農場の数も指で数えるほどだ。工業は凋落している。事故後、オブルチ地区の事業団に統合された営林事業団を、ナロジチ地区の管轄に戻すための取り組みがされ、今年ついにナロジチ地区特殊営林事業団が発足し、320人の職場が生まれた。さらに重要なことは、そこから地区的収入が生じるということである。配合飼料工場が残っているが、現在の稼働率は10～15%である。工場長は、「もし、以前の生産量を回復できれば、かつての従業員もみな雇えます。スタッフは非常に有能です。工場の敷地内に、バイオ燃料の製造装置が設置された時は喜んだものです。最初に、大豆油から320Lの燃料を生産しました。しかし、原料がないので、その後の発展はありません。この地区でナタネを栽培しなければなりません。ナタネは土壤を浄化しますし、その油からバイオ燃料を製造できるのです。しかし、遠い将来の話です。今は…」といつて両手を広げた。

日本の「チェルノブイリ救援・中部」は、「このナタネ栽培に資金を提供する」という決定を下した。初年度は、ある意味で実験的な栽培が行われる。プロジェクトの実施者は、ジトーミル国立農業・生態学大学の研究者たちである。

(次号に続く)

「チェルノブイリ救援・中部」2007年度活動計画  
…ホステージ基金との話し合い(2007.01.27)…

去る1月の代表団訪問では、新プロジェクトに関する調査・打ち合わせの合い間に、通常代表団の仕事であるホステージ基金との話し合いも行つてきました。

＜顔・膝つき合わせて＞

お互いの意見を忌憚なく話しあうことは、被災者の救援活動を連携して行う上で、日本とウクライナとの地理的距離を縮めるばかりではなく、文化的な違いやそれぞれの個性を理解しあう意味合いからとても大切です。カウンターパートとして苦労をいたわり合い、共通の夢へ向かって語り合い、年々のこの積み重ねによって、最近では人間的なあつい信頼関係が結ばれるようになりました。

いつものホステージ基金事務所で、運営委員会で練られた2007年度の活動・予算案を提示し、ホステージ基金のキリチャンスキー、ドンチェヴァ両氏の意見を求めました。



＜予算案について＞

主な事業配分は据え置きとなっていますが、日本側での寄付金の長期的減少も充分承知していて、「ウクライナの公共料金値上げが厳しい問題だが、自分たちでスポンサーを探すなどの自助努力を行う」ということで、了承されました。

＜継続事業について＞

民間保険組合に加入し、保険適用以外の医薬品のみを支援するという「被災者団体医薬品支援」は、「団体によってはうまく運営されているところもあるが、会員の理解を得ることに苦労をしているところもある」という実情を聞きました。しかし、「徐々に被災者の理解は浸透していくだろう」とのことでした。新年度には、民間保険組合の利用について、加入状況の調査・効果の評価を行うことをホステージ基金にお願いし、早速アンケートをとるなど快諾されました。

「シトーミル市立小児病院への粉ミルク支援」は、毎年のキャンペーンで集まった資金分で行う、「ナロジチ地区病院への医薬品支援」は継続する、被災学生への「奨学金制度」は2010年まで在籍学生に支援することなども、了解されました。



＜新プロジェクトについて＞

当初は、この「菜の花プロジェクト」について、ホステージ基金にも否定的な意見が強くありました。農業生態学大学や現地で話し合いを重ねていくうちに、その可能性が現実味を帯びてきて、今ではナロジチ再生への希望に向かって歩み出しています。

ホステージ基金は、ウクライナでの資金管理・広報活動を行っていきます。

(戸村京子)

## “希望でつなぐ日本とチェルノブリ” 講演会開催決定!! (来るる 4月 22日(日)午後 1時 30分~4時 30分 YWCAにて)

昨年、名古屋YWCAで開催された「チェルノブリ事故 20周年写真展」は、皆さんのご記憶にも新しいことと思います。21年目の今年は、場所を同じくして、ベラルーシ・ウクライナの子ども達を支援している「チェルノブリ子ども基金」との共同講演会“希望でつなぐ日本とチェルノブリ”を開催する運びとなりました。

1部では、「ナタネによる土壤浄化が、ナロジチの汚染地に住まざるをえない人々の希望の光になるのではないか」と調査を進め、初めは半信半疑だった現地の行政や大学の協力を得ることに成功し、いかに彼らと話し合い、プロジェクトを具体化させてきたか…、「菜の花プロジェクト」の意義を、救援・中部の河田昌東さんと原富男さんが語ります。

2部では、「チェルノブリ子ども基金」の佐々木真理さんが、事故を起因とした病気で苦しむ子どもとその家族のありのままを伝えます。彼女は毎年1回以上(多い年は3回も)、ウクライナ・ベラルーシの被災者を訪れ、主にホームステイで1ヶ月以上滞在し、子ども達や家族の聞き取り調査をしています。また、「子ども基金」では里子制度を設け、重い障害を持ち経済的に恵まれない子どもの支援もしています。今回、日本の里親に招かれたサフチツ・ナタリアさんも同席し、彼女の思いも語ってもらいます。「チェル・救」とは違う支援のあり方を知ってもらう、よい機会です。皆様、声を掛けあっておこしください。

(詳細はチラシをご覧ください。)

(榎本恭子)

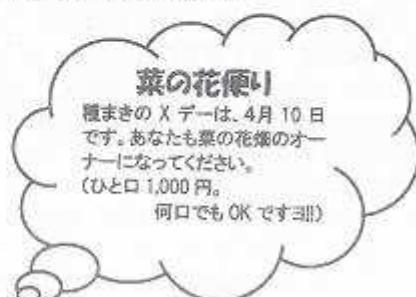
### 大竹財団様 捐助ありがとうございます。

去る3月22日、「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」に関して補助金を申請していた大竹財団より、「助成金の審査に合格しました」という、「春一番」の知らせを受けました。

1年目の菜種栽培に要する費用38万円の内、申請希望額どおりの30万円が助成されることになります。

○ 2月下旬に提出した申請書は、まだ十分にプロジェクトの詳細を伝えるものではありませんでした。しかし、「新しいチャレンジを評価する」という好意的な言葉をいただき、「桜」は咲きました。もちろん、プロジェクト終了時、事業報告書を提出するという約束も果たさねばなりません(担当者は、また自ら重い荷を背負ってしまったのかしら)。

大竹財団をはじめ、当プロジェクトに賛同し寄付を寄せてくださる方たちに後押しされ、いよいよその第一歩を踏み出す事がやってきました。さあ、「タネ」を播かなければ、プロジェクトは「生え」ません。すでにナロジチでは、事前の放射能測定と、種まきの準備が始まっています。「春の訪れとともに、ナロジチの人びとの心に希望の種を届けたい!」そんなみなさまの寄付をお待ちしています。(榎本恭子)



## 連載 56 臨時報告 チェルノブイリまであと 15 分

### 志賀原発の暴走事故と隠蔽の恐怖

次々と明らかになる、電力会社の事故隠しやデータ改ざん。日常的に行われる不正行為は、電力会社のモラルの問題にとどまらない。志賀原発の臨界事故公表に始まった、国内原発の一連の制御棒落下事故は、我々がチェルノブイリ事故と隣り合わせだったことを明らかにした。意図しない制御棒の落下、効かない安全装置、間違った手順書、これら全てはチェルノブイリ事故にそっくりだ。真夜中の午前 2 時という時間帯まで……。隠蔽された原発臨界事故の後に、東海村の核燃料施設（JCO）で臨界事故が起き、2 名が死亡した。

#### ● 続発した制御棒の落下

99 年に起きた志賀原発の臨界事故の公表が発端となり明らかになった、国内原発の制御棒落下事故は、「78 年東京電力福島第一 3 号、88 年東北電力女川 1 号、91 年中部電力浜岡 3 号、93 年東京電力福島第二 3 号、98 年東京電力福島第一 4 号、99 年志賀原発 1 号、2000 年東京電力柏崎刈羽 1 号」と、驚くべき頻度で起こっている実態が明らかになった。

制御棒は、原発のブレーキである。ブレーキの操作ミスで臨界状態が続いた志賀原発 1 号は 15 分間、福島第一 3 号は 7 時間半、全く制御不能状態での核分裂反応が続いた。他の原発も、臨界に至らなかったのは全くの偶然であり、どの事故もチェルノブイリのような重大事故に発展する危険性があった。

#### ● 電力会社の鈍感と隠蔽体質が真の原因

日本を破滅させたかもしれないこれらの事故の真の原因は、原発の構造欠陥に加えて、原発事故に対する電力各社の救いがたい鈍感さと隠蔽体質である。志賀原発での臨界事故が明らかにならなければ、他の原発での臨界や制御棒落下事故は公表されなかつた。「臨界は事故だが、制御棒落下は事故じゃなく報告義務がない」。これが、電力会社の見解である。

これは驚くべき鈍感さだ。ブレーキが効かなければ、いつ重大事故に発展するかも知れ

ない。そうした認識が彼らに全くないことが、今回の一連の事故隠しで明らかになった。中部電力の担当幹部は「私個人としては、この制御棒落下を公表する必要はないと思う」とうそぶいた。結果が重大でなければ黙っていれば良い、それが電力会社の本音だ。そんな体質が、東京電力に臨界事故でさえ 30 年間隠し続けさせたのだ。

#### ● 明らかになった原発の構造欠陥

今回の事故は、全て沸騰水型（BWR）と呼ばれる原発で起きている。一連の事故は、98 年の福島第一 4 号機事故を除いて、全て制御棒駆動装置の水圧を調節する弁の誤操作が原因である。BWR は、「制御棒を圧力容器の下から水圧で押し込む」という共通点がある。このことは、水路の弁の開閉を間違えれば、制御棒が落下する危険性があることを示す。

しかし、定期点検中のこれらの弁の操作について、日立や東芝ら原発メーカーは手順書に記載していなかった。操作は、「現場作業員の一存で行われていた」という。志賀原発では、「制御棒落下による臨界の際に働くはずの緊急停止装置が、作動しなかった」といわれる。しかし、中部電力浜岡の場合、弁の操作の間違いの結果、万一緊急停止装置が働けば、制御棒は更に大きく落下する恐れがあった。我々は、構造欠陥を抱えた原発の運転を、無知な電力社員に任せているのだ。（河田）

## 竹内さんのウクライナ便り

キエフでも、暖冬の終わりと春の初めのけじめがつかないまま、次第に樹々の芽が膨らんでおり、そのうち緑が吹いてくるのでしょうか。

ウクライナでは、現在の連立内閣与党（地域党、社会党、共産党）と野党（大統領の支持母体である政党連合「我らのウクライナ」、ティモシェンコ氏の率いる「ユーリヤ・ティモシェンコ・ブロック」）の対立が延々と続いており、3月下旬になって、「我らのウクライナ」に所属していた「ウクライナ実業家・企業主連盟」代表のキナハ氏は、政権与党連合との協力覚書に署名、経済相に抜擢されました。クチマ前大統領時代に首相その他の要職を務めているキナハ氏の「復讐」は、さほど意外とはみなされていないものの、これに勢いを得た与党連合は、残る野党の議員たちに「一本釣り」攻勢をかけており、これまでの通称「危機対抗連合」を「国民団結連合」と変え、総勢260名となった議員数を、大統領の拒否権をくつがえせる300名にまで至らせようと意気盛んですが、そう簡単には間違おろさないだろうというのが、各メディアの一貫した意見です。

一方、前内務大臣でオレンジ革命の立役者の一人だったルツェンコ氏は、議会外で「国民自衛」なる組織を発足させ、各地で集会を開き、現政権を批判して「正義の行進」を行おうと呼びかけていましたが、3月17日、「国民自衛」の下部組織である「犯罪拒否の選択」のオフィスが入っている集合住宅の地下で、TNT火薬や機関銃を含む大量の銃器が発見され、20日にはルツェンコ氏の家宅捜索が行われました。「オレンジ革命」の前に、ユシェンコ陣営を支持していた青年組織「ボラー（時機到来）」のメンバーのアパートで武器が発見された冤罪事件がすぐに想起されますが、「一昨年2発の銃弾を頭蓋に残して発見されたクラフチエンコ元内務相の死因は自殺だった」とする最高検察庁の見解が19日に発表されるなど、国の司法と政



府与党の新たな懸念の兆候が、不穏な雰囲気をかもし出しています。

そういう中、私は若い友人たちのつてで、レフ・トルストイ広場のそば、ブーシキン通りにあるウクライナ作曲家連盟のみすぼらしい建物で行われた、ヴァレンティン・シルヴェストロフ氏（1937年キエフ生まれ）の非公開連続講演の最終回に参加することができました。彼の作品のCDは、ドイツやオーストリアで製作されており、日本でも入手はさほど難しくありません。近作の歌曲やピアノ曲の録音をかけながら、司会者や会場の若い人（おそらく、音楽院作曲科の学生などでしょう）の質問にきわめて誠実に答えていた、古風な分享い眼鏡をかけた作曲家の姿と、どう考えても聴衆受けをねらっているとは思えない、静かな、あまりにも静かな彼の音楽は、休憩なし3時間半の緊張に値する感銘を与えるものでした。

そしてもう一人の巨匠、キーラ・ムラートヴァ監督（1934年、当時ルーマニアで現在モルドヴァのソロキに生まれ、60年代からオデッサのスタジオで撮り続けている）の新作『2つで1つ』（2つのストーリーを合わせて1本の映画にしてあるということです）が、ロシアの国際映画祭で、CIS諸国最優秀賞を得たというニュースがありました。彼女の前作『調律師』（2004年）にはシルヴェストロフ氏がすばらしい音楽をつけています。新作のキエフでの一般公開はまだですが、ぜひ映画館のスクリーンで観たいものと私は胸を轟かせています。

（3月24日）

### 事務局便り

3月に入り、気温22度という5月の暖かさになったかと思うと、一1度の厳しい寒さの朝が訪れたりと、春と冬を行ったり来たりの天候で、身体に変調をきたした人も多かったことだろう。「変な気候ですね。地図でもおきなけりやいいのに…。」と、先日も知り合いと話していたら、能登半島沖を震源とする震度6の地震。制御棒が抜けて、臨界状態に陥ったという重大事故を隠蔽していた北陸電力・志賀原発は、もろにこの地震の影響を受けている。不安は尽きない。

さて、いよいよ本格化する「菜の花プロジェクト」は、現地の農大・ホステージ基金との契約締結へ向け、最後の詰め。実施へむけ準備が着々と進んでいく。

この2月、3月は、菜の花プロジェクト申請書作成チーム(?)が、資金獲得のために、昼夜分かたずの申請書作成に励み、4つの申請書提出を行った。それに伴い、事務局もばたばたと忙しい日々を送った。そして、まずは大竹財団の助成給付が、3月22日に決定！このプロジェクトに無くてはならない!!「種蒔き」のための資金調達と相成った。率先のよいスタートだ。このプロジェクトを多くの人々に知ってもらうため、4月には、菜の花プロジェクト報告会を行い、また、「連合愛知」主催の「2007年連合フェスティバル」(下記参照)にも参加する。今年度は「菜の花プロジェクト」を引っ掲げ、対外的な働きかけに積極的に臨むことになりそうだ。

話は変わるが、事務局での6ヶ月の研修を終え、Nタマの山田さんと竹内さんが、「卒業式」を迎えた。それぞれのベースで、それぞれの個性を發揮しながら、「ミルクキャンペーン」「カードキャンペーン」を担当してくれた。二人とも丁寧な仕事をし、次年度のキャンペーンにつなげるべく、手を抜かずに、キャンペーンの「しめ」の仕事を最後まで行っていた。感謝。研修に来たことが、少しでも、彼らの「次」の展開の糧になってくれるや否や…。(山盛)

### 2007連合フェスティバル「NGO/NPO活動紹介コーナー」に出展します。

「菜の花プロジェクト」を皆さんにご紹介し、またプロジェクトの詳細についてご質問にお応えします。どうか会場へお越しください。ぜひ読者の皆さんにお会いして、直接お話ししたいのです。

日時：2007年4月28日(土)11:00～15:30（出展は15:00で終了）

15:00～15:30には、『お楽しみ抽選会』もあります。

場所：名古屋市総合体育館「レインボーホール」

### 編集後記

☆ウクライナ留学から帰国の疲れが取れぬ間に、さっそく助成金申請で揉まれ、甘えは許されなかった…申請書にプロジェクトの5年計画を書きつつ思う、5年後の私って！？(Kyo)

☆水漏れは悔れない。バッキン交換だけのつもりが蛇口の交換…換気扇も交換。とりあえずの対処で済むと楽観していたところ、排水工事や白蟻駆除まで進められた。まるで風邪を患って大病が発覚したような感覚。人も家も日頃のメンテナンスが大切ってことだね。(美)

☆広島に初めて行ってきた。広島といえばお好み焼き、市電、原爆ドーム。「70年は草木も生えない」と言われていたのに、見事な復興ぶり。ナロジチの未来を重ねたい。(佳)

☆『Loose Change (911の嘘をくずせ)』のDVDがインターネット上に掲載され、米国では既に数千万回のアクセスがあるという。政府支配者による洗脳から目覚めるため、映画「マトリックス」の主人公「ネオ」が飲んだ「赤い錠剤」を、皆が飲み始めたようだ。原発推進の日本政府や電力会社の事故隠し体質も全く同じ。やりたい放題の後は、知らぬふりを決め込み、あなたが何もしないことを期待している。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473